

平成21年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ オトキタ ノブヒロ
氏名 音喜多 信博

研究期間 平成21年度

研究課題名 マックス・シェーラーの哲学的人間学がもつ現代的意義

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	音喜多 信博	人間関係学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

私は、椋山人間学研究センターの「総合人間論」プロジェクトの研究員であり、ここ数年来、哲学的人間学の歴史的展開とその現代的意義についての研究を行っている。哲学的人間学とは、ドイツの哲学者マックス・シェーラー(1874-1928)が『宇宙における人間の地位』(1928年)において提唱した哲学の立場であり、哲学の伝統のなかに現れたさまざまな人間観と、新しい人間諸科学(とくに生物学や心理学)の人間理解との総合をめざす分野である。本研究においては、シェーラーの倫理思想をとりあげて、その成立過程を整理したうえで、今日の倫理学をめぐる議論のなかでどのような意義をもっているのか、評価することとした。

2. 研究方法等 (300字以内で記述)

本研究は、関連する文献資料の収集・読解・分析、学会・研究会や論文での成果発表というかたちで遂行された。具体的には、つぎのような手順で研究を進めた。①主著『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』などにおけるシェーラーの価値倫理学を、今日の英米の倫理学説と対比しながら評価した。とくに、メタ倫理学における道德の実在性をめぐる議論との関連について考察した。②今日、人間の道德は他の動物と共通の基盤をもっているのであり、遺伝子などの生物学的機構によって決定されていると考える進化論的倫理学が発展しつつある。このような自然主義的な倫理観に対して、シェーラーの価値倫理学の立場からどのようなことが言えるのか、検討をおこなった。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

以下では、上記の「研究方法」①②と対応させながら研究成果を説明する。

- ① 現在の英米圏におけるメタ倫理学においては、道徳の反実在論と実在論とが拮抗している。反実在論はおおむね非認知主義とも呼ばれ、道徳的命題については真偽の区別を問うことはできないとの主張をおこなう。そこから、道徳についての相対主義が導き出されることもある。一方で、実在論は認知主義とも呼ばれ、道徳的事実にはある客観的性格が備わっていると考える。シェーラーは、ドイツ語圏の現象学の伝統に属する哲学者であるが、実在論・認知主義に近い立場をとっている。さらにシェーラーは、道徳的判断における感情の役割を重視している。通常、道徳を感情と結びつける論者は、非実在論的・非認知主義的な立場をとるものであるが、シェーラーは逆に実在論的・認知主義的な立場をとっている。このことが、彼の価値倫理学説の大きな特徴であることが明らかになった。
- ② シェーラーの哲学的人間学や価値倫理学は、人間の「精神」の活動が、「生命」的なものから自立していることを強調する学説である。したがって、人間の道徳は生物学的な法則性によっては説明できないとシェーラーは考える。ところが、今日の社会生物学においては、動物の利他的行動の起源が、包括適応度の利他性や互惠的利他性の観点から解明されつつある。したがって、人間の道徳といえども進化生物学的基盤をもっているものであり、シェーラーの見解をそのままのかたちで承認することはできない。しかしながら、今日の進化生物学者のなかには、道徳は文化の一部となることによって独自の展開を見せ、遺伝的進化から相対的な自立性を獲得するということを強調する者もいる。シェーラーの一見したところ時代遅れの議論も、その言わんとすることは文化的進化の自立性という事態であったように思われる。私は、このような観点からシェーラーの人間学的な価値倫理学を解釈しなおした。そして、シェーラーの議論は、社会生物学者 E・O・ウィルソンに見られるような還元主義的な倫理観の一面的性格を批判するうえで、重要な観点を提供してくれるということを明らかにした。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①哲学的人間学	②倫理学	③社会生物学	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

今年度公開した研究成果は以下のとおりである (いずれも年度内に刊行予定)。

- ・著書 (共著) : 金承哲編著、竹田純郎ほか13名著、金城学院大学キリスト教文化研究所叢書『宗教と文化 I』、リトン社、2010年3月刊行予定。
 - ・論文 : 音喜多信博「E・O・ウィルソンによる人類の未来の予言について」、『椋山人間学研究』第5号、2010年3月刊行予定。
- また、今年度の研究成果の一部は、以下の研究会での口頭発表で公開される予定である。
- ・学会等発表 : 音喜多信博「社会生物学・進化心理学をめぐる哲学的考察-E・O・ウィルソンを中心に」玉川大学脳科学研究所脳科学リテラシー部門第7回研究会「社会科学と脳科学」、2010年3月12日、玉川大学にて開催予定。